

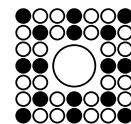
Newsletter of the British Council Japan Association



# BCJA Newsletter

No.8

September 30, 1997



## 「エジンバラ再訪」

山下純宏

今年の4月、妻と娘2人を伴って25年ぶりにエジンバラを再訪した。Royal College of Surgeons of Edinburghが私にFellowship ad hominemを授与するからセレモニーに出席しなさいとのこと。このニュースを聞いた途端、妻のみならず、幼時をエジンバラで過ごした長女と、エジンバラ生まれの次女が驚喜したことは言うまでもない。

2年前に、かつての恩師であるギリンガム教授(Prof. John Gillingham, CBE)夫妻を日本人の弟子たち数名で日本へ招待し、京都、金沢、名古屋、東京を案内した。私の現在の職場である金沢大学医学部でも特別講義をしてもらった。80歳の高齢にもかかわらず御夫妻ともに豊饒として、約2週間の日本滞在を十分に楽しまれたようであった。

私がBritish Council (BC)奨学生として初めて英国に渡ったのは、1970年でのことである。学園紛争の激しい頃で、全共闘の過激派学生によって私たちの研究室は物理的に封鎖された。その頃「体制派」と「反体制派」の間での不毛の議論が続く中、「何か意味のあることをしたい」という一心から、知人の紹介で三島市の国立遺伝学研究所の特別研究生として「実験的脳腫瘍の細胞遺伝学的研究」に従事していた。研究のかたわら、臨床を忘れないために、週に2日は尊敬する故福光太郎先輩のいる静岡労災病院(現在の浜松労災病院)脳神経外科に勤めていた。大学では臨床・研究すべてストップしていたが、どうしても本格的な脳神経外科学を学びたいという一心でBC奨学生にチャレンジし、首尾よく合格した。

留学先として、私は躊躇なく、ギリンガム教授のいるエジンバラ大学を選んだ。帰国して静岡労災病院に勤める予定であったので、エジンバラでは専ら臨脳神経外科の臨床を学ぶことにした。数年間無味乾燥の大学紛争の中にあっただけで、言葉の不自由さに苦しみながらも、本物の「脳神経外科学」に接した喜びで私の心は驚喜した。Royal Infirmary of EdinburghとWestern General Hospitalにおいて、Clinical Assistantとして病棟業務のみならず、当直業務、外来業務にも参加した。患者のScottish accentに悩まされたり、カルテ記載、手術記事、GPへの対応で苦労したことも、今では楽しい思い出となっている。少し遅れて日本医大の杉浦和朗さんと東大の塚本 泰さんがBC奨学生として同じギリンガム教授のもとへ留学してきたので、より楽しく賑やかになった。私の滞在した2年間に、ギリンガム教授の教室には、インド、パキスタン、タイ、ビルマ、シンガポール、ホンコン、オーストラリア、南アフリカ、ケニア、クーウェイト、ギリシャ、ユーゴスラビア、イタリアなどから大勢の外国人医師が、Registrar または Clinical Assistantとして頻繁に出入りしてい

た。特にインド出身の人が多かった。彼らの殆どはFRCSEd (Fellow of Royal College of Surgeons of Edinburgh)の資格試験にパスすることを目的としてエジンバラへ来ていた。英国の旧植民地の国々では、本国でよい地位につくためには、FRCSの資格が必須のようであった。英国ではFRCSには、エジンバラのFRCSEdと、ロンドンのFRCSEngの2つがある。人によっては複数の両方の資格を取り、肩書きにFRCS (Ed & Eng)などと記載している。外科医はこの資格を取ると、Dr.ではなくMr.と呼ばれる慣わしになっている。かなり難しい試験で、合格率は25%程度という。受験する人達は約1年前から試験の準備に没頭する。その当時、お前も受けてみないかと誘われたこともあったが、今さら受験のために一般外科の勉強に時間をかけるよりは、脳神経外科の勉強に専念する方がよいと判断した。

2年前、来日したギリンガム教授に、「ジュンコー、君はFRCSを取る気持はないかね」と聞かれた。「あんなむつかしい試験を今さら受けても通るはずがないでしょう」と答えると、「いや、試験なしに取る方法があるのだ。とにかく履歴書と業績リストを私まで送っておきなさい」とのこと。

その書類が評議員会にかけられ、承認されて今回の沙汰となったわけである。Fellowship ad hominemは試験免除の特別の名誉会員証である。改めてその意味についてギリンガム教授に聞いてみると、名誉会員には2種類あり、1つはHonorary Fellowshipであり、その分野に大きく貢献した引退直前の人に与えられるもの。Sir Joseph ListerやDuke of Edinburgh(エジンバラ公)がこれを受けている。もう1つはFellowship ad hominemであり、既に重要な貢献があり、今後更に貢献が期待できる比較的若い人に与えられるもの、だそうである。かくして私は自分の肩書きとして、MD, PhDに加えて、FRCSEdを使うことができることとなった。

このRoyal College of Surgeons of Edinburghは1405年に創立され、500年の伝統を誇る組織である。エジンバラ大学医学部の創設が1726年なので、このRoyal Collegeは大学よりも古い歴史を持つ。Royal Collegeは日本でいうところの単科大学ではなく、ある特定の専門分野の職業人のギルドのようなもので、自分達の集会所をもち、自分達の技術レベルの維持・発展を図ることを目的とする組織である。虎ノ門病院院長の秋山 洋先生について日本人で2人目Fellowship ad hominemを授与される榮譽に浴することができたのも、恩師のギリンガム教授が教授退官後、このRoyal CollegeのPresidentを3年間務め、今もなお評議員会のメンバーの一人として健在であることが、私にとって極めて幸運であった。西洋の近代医学はイタリアのパドア、ポーロニアにおこり、オランダのライデンを経て、18世紀にはその流れの中心はエジンバラに移った。19世紀から20世紀前半には医学研究の中心はドイツに移

り、戦後にはそれは米国に移った。

今回の訪問では空港からお城がみえるシェラトンホテルまで、ホテルから式典会場まで、すべて送迎の車があり、まるでVIP扱いに私も私の家族も、その非日常性に眼をキョロキョロするばかりであった。招待状には、式典はlounge suiteでよいが、晩餐会はdinner jacket着用のことと記載されていた。懐かしのWestern General Hospitalで世代替わりした現在のスタッフの前に、記念講演をさせてもらったが、彼らも私を25年前にこの病院で働いていた先輩として、敬意をもって対応してくれたように思う。講演に先立ちギリンガム教授が私をみんなに紹介してくれた。既に退官したかつてのコンサルタントMr. Shawも私に会いに来てくれた。Mr. Harrisも健在であるが、所用で来れなかったとのことである。その日の夜は、Dalmahoy Country Clubという郊外のゴルフクラブで、私達夫婦のために同門会のような歓迎のDinner Partyを開いてくれた。

25年前に下宿していた、Inverleith Row近辺で世話になった人達とも旧交を温めることができた。プリンセスストリート、エジンバラ城、ウェストエンドなど、懐かしくも美しいエジンバラの街並みを飽きることなく眺めていた。1週間弱の滞在であったが、週末には家族4人でレンタカーで、ロッドホローモッド、ケンモア経由でダンケルドへ行き、ギリンガム教授が私たちのために予約してくれたスタキス・ホテルに投宿した。

かつては「揺りかごから墓場まで」といわれた英国のNational Health Serviceも、高齢化社会を迎え、サッチャー政権のもとで、かなり様変わりしたようである。もともと医療は国家予算で賄われ、患者にとって医療は無料であるが、国家予算は限られているので常にcost performanceが意識されている。英国では新しい治療法の開発よりは、むしろ患者のQOLの改善の方にエネルギーが注がれているようである。わが国においても医療費の膨張が憂慮され、健康保険の患者負担の増加額が検討されている。民主主義国家の先輩としての現在の英国に、10年先のわが国の姿を見るような思いがする。(YAMASHITA Junkoh, 金沢大学医学部脳神経外科学教授、Edinburgh University 1970/72, yamashit@med.kanazawa-u.ac.jp)

## 短信

細井為行

バーミンガム市にあるアストン・ビジネス・スクール(Aston Univ.)でのレクチャーも、二年目となると、多少は勘どころもわかってこよつと言うもの。一年目は、話す(と言うより読み上げる)ことだけで精一杯でしたが、今年(1997年)は時折学生に対して質問を投げかけ、フィードバックを確かめることもしてみました。隣席のコーディネーターとの対話があっても、正視すべきは彼の顔ではなく、むしろ学生や収録中のビデオ・カメラの方こそだということも、実感できるようになってきました。

但し、ジョークをしかけるには気をつけた方がよい。彼らの笑いの感覚は日本人とはかなり違うから、余程の自信がない限り、笑うのはジョークをとばしたつもりになっている手前ばかりで、教室全体はシラケてしまうことになりかねませんから。僅か数週間のレクチャーで、日本のビジネスローがどの程度わかってもらえるのか、初めから確信できるものはない。しかし、少なくとも、現地学生が、教壇に立つ日本人に違和感を持たなくなってくれるだけでも、出かけてくる価値はありましようか。

(HOSOI Tameyuki, 1976 / 77年 ロンドン大学 ユニバーシティ・カレッジ法学部大学院)

## 英国留学の思い出

西村昌彦

BCのプログラムで'95年5月から一年間、英国カンブリア県ウインダーメアへ留学する機会を得た。帰国後の一年はいわゆる"留学ボケ"で、研究が停滞している事に気が付いたのは帰国半年後、それ以後慌てて仕事を開始するも時間ばかり懸かってしまい、大した成果も上がらないまま一年が経ってしまった。今となってはただただ懐かしく思う英国での思い出を、簡単に書いてみたいと思う。私の留学生活はまさに"二世誕生にふり回された日々"であった。留学の七ヶ月前に結婚した私はまだ新婚気分のまま'95年5月17日に英国入りしたが、その一週間後に妻が体調不良を訴え、慌ててNHSのヘルスセンターで診察を受けた。その後、妻のそれが妊娠による"つわり"であるとわかり、意外な宣告に動揺した我々を見て、「君たち嬉しくないのか？」と心配そうに話しかけたGPの顔が今でも思いだされる。その後、妻を帰国させようと説得工作を仕掛けるも聞き入れられず、結局は彼女自身の決断で英国で出産することになった。その事を告げたときのGPの嬉しそう顔も同様に思い出される。

私の職場となったInstitute of Freshwater Ecologyは英国のNatural Environmental Research Councilを母体とするいわゆる地方の一研究機関であり、大学ではないので規模こそ小さいが、陸水学の研究所としては世界的にも有名であった。英国最大の湖、ウインダーメア湖の畔にあり、風光明媚なその土地柄は"英国人の心のふるさと"などと呼ばれているらしい。ホスト・サイエンティストのピックアップ博士とは東京で2回会っており、共通の研究テーマを持つことから、私の現地での研究テーマもすんなり決まった。彼も久しぶりのポストドックという事もあり、随分と興奮していたようだ。数日してから妻の妊娠とこちらでの出産を打ち明けると、彼は大変喜んでくれたが、後にひとこと「お気の毒に、同情するよ・・・」と言ったのであった。この言葉の本当の意味が分かったのは英国では珍しく雨の少ない"最高の夏休み"が終わった頃であった。

9月に入ると病院主催の"母親学級"に同伴したり、子供用の衣類・寝具を揃えたりと随分忙しくなって、すっかり仕事どころではなくなってしまった。研究所の同僚は事情を察してくれて、「おまえが忙しいのはみんな理解するから、仕事の方はマイペースでやりなさい。」などと言ってくれたのは本当に救われた。ともかくこの異国での初産という経験は若い夫婦を翻弄するのに充分な一大事であったが、多くの友人達に支えられて翌年の1月下旬に妻は女の子を出産した。出産後は義母がわざわざ日本から来てくれたこともあり、私も仕事に集中できたが、運悪くこの時期英国は記録的な豪雪となり、研究所は事実上10日間ほど封鎖同然となった。それでもどうにか帰国の5月までに一仕事出来たのは、今思い起こせばまさに奇跡のようである。

仕事の面では十分な成果というわけにはいかなかったが、人には大変恵まれた留学だったように思う。半径数十マイルの中で日本人は我々だけという場所での生活は不自由、困難の連続であったが、いつも誰かが助けてくれた。特に妻は妊娠、出産、育児を通じて現地の様々な人と知り合いになり、彼らとの交流は未だに続いている。日本のようにモノの溢れた物質的な豊かさは無いが、精神的に豊かな"大人の国"というのが、我々の率直な英国の印象であった。一年というと余りにも短くて、彼らのほんの一部分しか判っていないとは思いますが、仮に再び外国留学の機会が得られたら、私はやっぱり英国に行きたい。「英恵」と名付けた娘を連れてもう一度英国を訪れる日が来ることを願って止まないものである。(NISHIMURA Masahiko, 東京大学海洋研究所, 英国淡水生熊研究所 1995/96)

## 随想「ケム川の流は絶えずして…」(続々)

池島大策

ケンブリッジ(大学)での人脈が世界規模で広がることは、今さら言うまでもないであろう。この点で、例えば日本でも、歴史と伝統のあるケンブリッジ・オックスフォード・ソサイエティが代表的な団体で、活発な活動が行われてきている。おそらくプリカンの会員の中にもオックスブリッジでの生活で培った人脈を、その後の生活に活用されて、活躍されている方々が少なくないことは容易に察せられる。(なお、筆者のケンブリッジ・ライフの一端は、以前に書いたBCJA ニュースレター第6号(1996年)及び同第7号(1997年)を参照。)以下は、筆者の友人紹介を通じたケンブリッジ・ライフの一端である。

私の場合、まず、スイス人のセルジュ(Serge)にあったことからお話ししよう。彼と初めて会ったのは、ニューヨークでのアメリカ国際法学会年次大会(4月上旬)でのことであった。彼も、南極における国際法の諸問題に関心を持っており、博士論文をスイスで出版したばかりであった。その数年前に、彼はウォルフソン・カレッジ(Wolfson)に所属しつつ、ケンブリッジのスコット極地研究所(SPRI)で在外研究し、その結果、書き上げたのが彼の博士論文であるとのことであった。同研究所の研究員の一人、ボブ(Bob)とは、よく金曜の夕方になると研究所の近くのパブに行ったらしく、後に私もボブや他の研究員たちとパブ・クローラをするようになった。また、その後、同じ年の5月からジュネーブで開かれた国連の国際法委員会での国際法セミナーでも一緒に一ヶ月ほど勉強することになった。お互いまさかこんなに早く再会するとは思っていなかったが、ある日曜に、彼は快く私をヌシャテル(Neuchatel)にある自宅に招待してくれた。眼下にヌシャテル湖の後方彼方に沈む夕日を眺めながら、私たちは、ハンガリー人の奥さんの手作り料理をご馳走になった。上等の赤ワインでいい気分になった夕方、彼は親切にも一泊していくことを強く勧めてくれた。

彼にまた会ったのは、この3月に調査の委託を受けてジュネーブに出張をした際である。彼に会う前に何度も連絡を試みたが、彼とは連絡が取れなかった。それも、実は彼の奥さんが重病で手術を受けるため、彼も奥さんの祖国ハンガリーに同行して、暫くスイスを留守にしていたとのことであった。それでも、帰国の前々日の夜に電話をくれて、やっと連絡が付いて再会することになったときは、お互いに喜んだものである。

研究者としても、また公務員(スイス外務省のWTO担当官)としても精力的に活躍する彼の姿には、眩しいばかりのエネルギーが漲っていた。長老が支配する旧態依然の学界や、官僚制の悪弊がはびこる役所の醜態などについて、歯に衣せぬ批判を展開して「世相を斬る」ところには、私もいたく共感した。このような厳しいところもある反面、彼は大きな体に似合わず、とても細心で気配り上手な、心優しい男なのである。最後に駅で分かれるときには、お互いに姿が見えなくなるまで、列車の窓から身を乗り出して手を降り続け、別れを惜しんでくれた。

次に、この欄でも度々触れてきた友人ファディ(Fadi)について、紹介しよう。彼は、ついこの春にめでたく博士論文をケンブリッジに提出することができない、目下面接審査(viva)に備えているところであるという。彼とは、国際法研究センター(RCIL)にて、まさに「同じ釜の飯を食った」仲であるし、同じ学問に志す同好の士でもある。レバノン出身の彼は、非常に誇り高い、そしてユーモアたっぷりな好青年でルックスでも欧米人にひけをとらないハンサム・ボーイである点で、他のアラブ系の同年代の青年よりも特をしていた、といったら言い過ぎであろうか。そそっかしくて、わがままな反面、

お人好しで屈託がないため、人気もある。彼と私は、友人を誘ってケム川にパンティングに出かけては、川面をなでる長閑な歴史の風を肌で感じた。そして、我々は、RCILを事実上「平和的に占拠し、管理・夜警している」ことをいいことに、カクテル・パーティやバーベキューを盛大に主催しては、社交を楽しんだものである。彼の専門は、国際経済法で、特にガットやWTOの問題を熱心に研究していたため、私のジュネーブ滞在中にも二人でたびたびレバノン料理屋まで行ってケバブ(shish kebab)(アラブの串焼きの肉料理)を堪能した。

研究所でも彼の特異の麺類の料理を何度もご馳走になったし、こっちも和食(といっても電子レンジしかないキッチンではたかがしれていたが)の代表として「ませずし」などで持て成した(いわば「同じレンジの飯を食った」仲である)。ただ、敬虔なイスラム教徒の彼は、酒を全くやらず、自分の信仰に非常に忠実で、もちろん豚肉も口にせず、絶食の時期にはいかなる誘惑にも負けなかった。楽しかったのは、夜中の12時頃になって一緒に食べる「セカンド・ディナー」(夜食のことを我々はこう呼んだ)である。といっても彼の食べる早さと量は並大抵ではなく、私の2倍(つまり、普通の人の3倍ほど)程で、お腹を一杯にすることで満足しているようでもあった。そのため、彼はケンブリッジでの生活でお腹がすっきりでっぱり、「運動をしなきゃ!」と気にしてはいても、いつも夜食の誘惑には勝てず、野菜もほとんど口にしない肉食主義者であった。

私は夜食の後も2時間ほど起きて勉強をしたりしていたが、彼はその後すぐにベッドに入ったので、それが原因で彼は徐々に体重が増えていったのだろう。柔道をしたり、クラシックギターがプロ並みの腕前と言うところで、ともに趣味が一致したし、また、メイ・ボールを梯子したり、ガートン・カレッジ(Girton)の芝でテニスをした後、その室内プール(ガートンには、ケンブリッジのカレッジで唯一室内プールがある)で泳ぐという贅沢に興じたり、隣家の人たちとのクロックエーを通じて知人の輪を膨らませていった。ともにガス・コンロのない不便なキッチンシェアし、夜中にはヒーターの効かない寒い英国の冬を何とか乗り切り、隣家の賄いのストロング(Stronge)夫人に洗濯や掃除を頼むなど甘えて、ご馳走にもなるといういい身分であった。研究の方でも、自国の置かれている国際的な立場を憂い、国際社会にいつか必ずや「法の支配」(Rule of Law)が達成される日が来ることを幾たびとなく熱く語り合った夕べがとても懐かしい。

彼は、研究所で一人Ph.D.の学生の身分であったことに不満を抱き、「学生」として扱われていたことに憤懣やるかたない旨、私に訴えたものだった。ファーストネームで呼び合う人間関係とはいえ、呼称を始めとして公式の場では、やはり教授、(訪問)研究員、教員などとの待遇の差は明らかであった。これは、欧米の大学ではどこでもそうなのかもしれない。そのため、いつもフェローの地位に憧れを抱いていた彼であったが、この春めでたく所長から直々に同研究所のフェローに任命されたとの由、私は心から自分のことのように嬉しく思っている。

続いて、カナダ人二人を紹介しよう。まず、ロバート(Robert)は、モントリオールをこよなく愛するイタリア系カナダ人で、ケンブリッジで法学修士号を得たことを誇りにするものの、英国の欠点を容赦なく批判する面白い男である。イギリスでは何でも古いものがいちいちとする風潮と、法律の伝統を重んじる気風から、彼は、自分のカレッジとして迷うことなくトリニティ・ホール(Trinity Hall)を選んだという。普段は所長の助手兼研究員をしており、なかなかのジェントルマンであるが、大声でしょっちゅう電話をかけていたのや大食い、美人の女性にのみ優しいといった人柄をよく思わない職員の人もいた。自分の名前をアメリカ人のようにBobと

ニックネームで呼ばれたり、Rob(「奪う」という意味の動詞もあるためか)と短縮されたりすることが大嫌いで、自分の尊敬してやまない英国人ラウターパクト(Lauterpacht, E.)所長が自分のことを「ロボット」という音に近い発音で呼ぶ、その音の良さに酔っていた。彼も当初は研究所で我々と寝食をともにしていたが、そのうち、カナダ人のジャック(Jack)と借りたアパートに引っ越した。このアパートは、フィッツウィリアム・カレッジ(Fitzwilliam)のグラウンドの裏にあり、この芝のグラウンドでは、ケム大の学生たちを大勢交えてよくクロケーやテニスをやりながら、キュウリや苺の入った「ピムズ」(Pimms)という英国独特のカクテルで喉の渇きを癒やした。ロバートとジャックのアパートで催されたチーズ・フォンデュのパーティでは、ワインに悪酔いして、自転車での帰り道にとんだ目にあつたことを覚えている。ロバートは、大のラテンミュージック好きで、サルサやランパダをはじめとするラテン・ダンスが非常に上手かった。彼は、しばしば、我々仲間たちを誘っては、ケンブリッジにある数少ないダンスフロアー、例えば、カフェ・ピアツツアやシカゴに踊りに行った。といつても、私は下手だったので、フロアーの隅で黒いボトルに入った「K」というサイダー(アルコール分が8パーセントくらいあるシードルのこと)をちびちびやっていたが、彼は、フロアーの真ん中で大勢の観衆の拍手の中、見事なダンスを披露していた。

ロバートは、粗雑で他人のことを気にしないという面もあったが、非常にナイーブで初対面の人にも優しく接し、思いやりのあるところをよくみせる男である。彼のおじいさんが有名な数学者らしく、ニュートンの書いたプリンキピア(Principia)の初版本をカナダのどこかの大学に寄付したなどと話したり、ローマが自分の家系のルーツであつて、ミラノやジェノヴァよりもローマの方がずっと素晴らしいと、自慢することも少なくなかった。この春、前記の出張でパリに滞在した折も、国家間の訴訟を扱うことなどで著名なロー・ファームで働いているロバートは、再会を祝してパリの街を案内してくれ、街の古い佇まいを残すサンジェルマン・デ・プレの近くのレストランでフランス料理をご馳走してくれた。パリでは、意外にも、友人と呼べる仲間が少ないらしく、寂しがついていた。

もう一人のカナダ人の友人、マイケル(Michael)は、ケンブリッジで国際法で博士号を取得後、オックスフォードのジーザス・カレッジ(Jesus College)に移り、リサーチ・フェローとして、研究指導にあつている。しばしば、電子メールで近況を報告してくれて、相変わらず精力的な活躍ぶりを教えてくれる。彼は、ケンブリッジで博士課程にいるとき、授業(特に合同ゼミ)では必ず真っ先に質問をし、学会でも居並ぶ大家を前にして臆することなく、コメントと質問を連発するのが常だった。そういう彼だから、特にケンブリッジにくる日本人の学者に対しては、いわゆるサイレント・パートナーと考えるのか、やや軽んじたような姿勢が垣間見られたような気もする。しかし、彼は、研究者たちの間でも比較的若手の私に対しては、少々違う対応を見せたと思う。ある日、博士課程の学生向けに彼が自慢げに行った研究発表の際に、私は、恐らくは大方の期待を裏切って、質問、しかもやや厳しいであろう質問を敢えて浴びせてみて、彼の反応を探ったことがある。私も自分の英語の下手なのを覚悟していたので、意図的にゆっくり堂々と、それでいながら「チクリ」と聞いてみた。さすがの彼も、虚を突かれたのか、やや慌ててエクスキューズをしてはいたものの、さすがに何とか取り繕っていたのが印象的である。

また、別の機会に、ロンドンの経済政治学院(LSE)で開かれた学会で、英国の国際法を代表する大家の一人、オックスフォード大学のブラウンリー(Brownlie, I)教授が研究発表を

行った際に、私も勇気を出して同教授に質問をしたことがある。端から見れば、日本からきた若造が一所懸命に老大家に食いついた様子を、アライオンに挑み懸かっただけのように滑稽な様子として見ていたかもしれない。この学会でも相変わらずの質問魔ぶりを見せていたマイケルは、休憩に入った際、真っ先に私のところに歩み寄ったかと思うと、さっと右手を差し出して握手を求めてきた。曰く、「やったな。やっとこれで君も一人前になって、俺たちの仲間入りだ。」と。私は、数人いた日本人を代表して質問したつもりはなかったし、同教授を「敵にとって不足はない」と思って質問したわけでもなかったが、遙か日本から英国に来て勉強をしていて、これほど充足感を感じたことはなかった。いずれにしても、マイケルの持つ積極性、熱意そして潔さは、我々日本人が学ばなければならないところだろうと思う。確かに、「クイーンズ・カレッジ(Queens')のマイケルここにあり。」と言わんばかりの彼ほどのパフォーマンスともなると、他人からは嫌みなやつだとか、自己顕示欲が強いと誤解されかねないだろう。しかし、そんなことはどこ吹く風と言わんばかりに立ち向かう彼の姿勢からは、自信に満ちあふれた強烈な個性の持ち主という印象を受けた。

これまでに紹介したセルジュ、ファディ、ロバートそしてマイケルたちとは、今でも電子メールをはじめとして、季節の頼りを出し合う交流が絶え間なく続いている。私は、これらの友人の他にも多くの心優しい、立派な友人たちに、ケンブリッジで出会うことができた。この結果築かれたワールド・ワイドな人脈は、私のケンブリッジ・ネットワークの一環であり、財産でもある。私を取り巻くこのネットワークは、止まることを知らないケム川のように、私の生活や仕事に潤いを与え、活力を注いでくれている。留学後もやはり、「ケム川の流れ」は絶えることなく流れ続けている。

(IKESHIMA Taisaku, 慶應義塾大学総合政策学部, University of Cambridge 1994/95, ikeshima@sfc.keio.ac.jp)

## 『英国ガーデン物語 庭園のエコロジー』 赤川 裕

英国流の庭園作り、ないしは英国流園芸が最近わが国で関心を集めています。一過性の流行でないことを願っておりますし、また、単なる趣味のレベルに終わらないようでありたいと思っております。

そうした思いが結晶して、最近一冊の本を書きました。『英国ガーデン物語 庭園のエコロジー』(研究社出版、2200円)です。英国庭園が今日のような姿になるまでの歴史的過程をしっかりと書きました。各時代の庭と人との関係のなかで、特に英国において次第に明らかになってくる傾向、庭を通じて自然と人間のかかわりのあるべき姿を指摘しました。英国庭園の世界は、奥の深いすばらしいものですね。

(AKAGAWA Yutaka, 明治学院大学教授, University of Cambridge 1973/74)

「英国庭園は「自然らしさ」の庭である。植物を形に押し込めないで、季節季節の花を生かす。このような庭がどうしてできてきたのか。そこには人間の天国観、英国の政治史、思想史、文学史、自然科学の発達などがすべてかかわってくる。そしてこれからの人間と環境の関わり方も教えてくれる。庭園の、驚くべき広さと深さを持った世界をたづねるとどうぞ。写真図版多数」

A5版208頁 (研究社の出版案内より)

## 四十年前のイギリスの思い出(断片)

横松 宗

私は約四十年前の1958年春から秋にかけてロンドン大学に留学した。留学先は教育研究所(Institute of Education)とアジア・アフリカ学部(School of Oriental and African Studies)であった。短い期間ではあったが、日本人も少なく、多くの思い出がある。

ここには、当時求められて「朝日新聞」の文化欄(学芸欄)に書いたものを紹介していただくことにした。現在とは相当ちがうところがあるが、当時の状況を知る上にも参考になると考えたので、あえてお送りする次第である。

### ロンドン大学の学生サークル

イギリスの学校系統や教育活動が複雑で多様性に富んでいるのは、必ずしも伝統を固守する人たちが、教育の形式的な統一を阻止しているところからきているとはいえない。それはむしろ、教育を受ける側も教育を行なう側も、どちらも選択の自由をもっているところにもとづいている。学生の自発的なサークル活動やクラブ活動も、こうした自由を享受している学生の立場から出発しているのである。

イギリス、正確にいえば連合王国には、24の大学(ユニバーシティ)があり、それぞれの大学は一つまたはそれ以上のカレッジを持っている。たとえば当時、最も大きいロンドン大学は48のカレッジやスクール(学部)をもち、オックスフォードは28、ケンブリッジは24のカレッジをもっている。しかしながら、イギリス全体の大学の学生の数は、わずかに83,000人余り(内女子が20,000人余り)であり、アメリカや日本の大量生産に比べて、むしろ少数精鋭主義をかかげているかにみえる。有名なオックスフォードとケンブリッジの両大学は古い型の大学の代表であり、学生たちはそれぞれの学寮に属しながら、個人指導を担当する教職員を中心として、一種の塾的な教育を受けており、何よりも教師との人格的な接触による人間の教育が尊重されている。

これに反してロンドン大学は、勤労学生や校外学生のためのもので、資格授与機関から発展した近代的な大学の代表である。この大学は宗派に関係もなく、また学寮の制度もない。従って、学生たちの自主的なクラブ活動こそは、古い型の大学における学寮生活に代るものとして、きわめて重要な意義を有するわけである。

大学の自治連合会はユニオンといい、その委員会はカレッジやスクールの学生代表者で構成され、委員長以下の各役員が選ばれる。もちろん、各カレッジやスクールにはそれぞれの自治会があり、その下に各種の単位サークルが所属している。そして、その上に大学全体としても、それらのサークルの連合体ないし統一体のようなサークルのクラブがある。

ユニオンに直属する主なサークルをあげると、討論会、演劇サークル、オーケストラその他の音楽サークル、美術サークル、考古学会、歴史学会、山岳会、スキー会、体操サークル、その他各種のスポーツサークルがある。なかにはジュード(柔道)サークルなどもある。サークルの数は全部で100近くになっている。

なかでもこの大学に独特のサークルとしては、まず各種の宗教的なサークルをあげることができる。例えばカソリック・サークル、メソジスト・サークル、及び教会研究のサークルなどの活動は、最近宗教的関心の薄らいでゆくこの国の青年たちのなかでは、いくばくかの使命を果しているといつてよいであろう。

また、この大学でとくに特色のあるサークルは、各民族別のサークルであろう。アラブ、インド、ユダヤ、フランス、ドイツというような出身民族別のサークルがこれである。とくに、アラブ系の活動はめざましく、毎年委員長以下の役員

を選出し、その発言権は大きい。ちなみに、40カ国くらいの国々から留学してくる外国人学生の割合は驚くべき程度で毎年全学生数の2割から3割を示している。またこういった外国や属領だけでなく、ウェールズ、スコットランド、イングランドというような出身地別のサークルもあって、この国の民族構成の複雑さを示している。こうして、ユニオンの本部はさながら学生の国際的社交場の観を呈しており、当時の日本などでは、到底想像もできないものがある。

しかし、これらのサークルにもまして、私たちの注意をひくものは、ユースホステルとかボーイ・スカウトなどを援助するサークルやまた動物愛護運動を推進するサークルの存在であろう。これらの活動は、国連やユネスコと提携して行う世界大学サービス活動とともに、この国の学生の国際性と社会性をもがたっている。

さて、学生の政治活動であるが、一口に言えば、今のところ全体的に低調であるといつてもよい。もちろん、社会主義研究会や自由主義研究会もあり、とくに保守主義のサークルのごときは、保守党から公然と財政的援助を仰いで華やかに活動しており、この点日本では考えられないことであろう。

しかし、学生は全般的にはスポーツ、芸能、研究活動などに熱心であつて、政治活動にはそれほど関心を示していない。これは一つにはイギリスでは大学生の数が少なく、大学の関門は少数の選ばれた者だけに限られているということにも原因があるが、大衆の一般のレベルが高く学生の地位が当時のわが国などとかなり質的にちがっているからではあるまいか。

ただ、国際的な活動の一つとして原水爆反対の運動などは近頃ようやく盛んになってきている。しかしこの運動とて、今のところ原水爆実験に関する世論調査や労働団体などに対する協力の域を脱していない。これは一つは、イギリス自身が核兵器保有国の一つであるという微妙な立場におかれているからであろう。ユニオンの副委員長ゴムパート君は「原水爆反対の問題については、私も相当な同情と関心をもっている」と語っていた。

ところで、こうした各サークルの活動は、つねに委員会や全体会議の話し合いによってきわめて民主的に運営されている。私も二、三の会合に出席してみたが、かれらは討議に際しては、徹底的に納得のゆくまで論議をつくすにかかわらず、決して口角アワをとばしたり、あるいは相手を罵倒したりすることはない。相手の論旨を批判するときには、つねに軽いユーモアを交えた皮肉をもってむくいている。こういったところは日本人の会合よりもはるかに大人らしく感じられる。しかも、彼らは少数者の意見であっても、耳を傾ける値うちのあるものは、必ず何らかの形で生かしていこうとしているようである。それから、ユニオンの週刊機関紙「セネット」(トランペットの古語)は、機関紙サークルによって発刊されているが、わが国の大学に見られるような学術的な論文はほとんど見当らず、もっぱら各サークルの活動と一般的なニュースを豊富にとり入れている。

ロンドン大学の場合、ユニオンは五階建のもので、大きなビルディングを持ち、その中には集会場、図書室、劇場、食堂、バー、ダンスホール、読書室、各種の室内遊技場、体育館及び25ヤードの温泉プールなどが完備し、豪華な設備をほこっている。もちろんこの建物は大学のもので、その運営は大学当局(教授)と舎監と学生代表の三人が構成する運営委員会によってきわめて円滑に管理されている。

このほかユニオン加盟の各サークルにも、必要なものは予算の許す範囲内で助成金が与えられる。これらの助成金は総計1年間1,000ポンド(100万円)程度であり、運営委員会によって個別に審議され支給されているが、学生側としては一括して無条件にユニオンに与えられることを希望しているよ

うである。

イギリスの学生活動は、従来いたずらに伝統と格式を誇る古い型の学校の支配によって、きわめて低調であったといってもよいが、今やロンドン大学をはじめとする新しい型の大学の学生たちの活発な自発的学習によって、袋小路からの突破口を見出だそうとしていることは事実である。イギリスの指導原理たる自由主義の限界が、内からも外からも批判の対象となっている現在、この国の学生たちが新しい世界の動向に対して今後いかなる反応を示すかは興味深い問題であろう。(1958年8月30日「朝日新聞」文化欄)

## イギリスの労働組合と教育

イギリスの労働運動200年の歴史は、同時に人権の獲得の歴史でもあり、また自由な人間の形成の歴史でもあった。事実近代の世界でイギリスほど真剣に労働者教育の問題ととりくんできた国はあるまい。

イギリスにおける労働者の教育は、産業革命時代に経営者の行った技術教育からはじめられたが、19世紀の中ごろ、早くも労働者を主体とした自発的学習活動が展開された。チャーチストの活動、大学拡張運動、さらに、労働者教育協会の設立による労働者の再教育がこれである。

当時のイギリスの労働組合は、唯一の連合体であるトレイド・ユニオン・ कांग्रेस(労働組合連合会議)に結集されているが、この会議は当時90年の苦闘の歴史(現在では130年)をもち、800万以上の労働者によって組織されている。教員組合をふくむ連合会議の教育活動は、国民全体の教育に関する各種の運動として展開されている。当時の保守党内閣は、子弟数の増大にもかかわらず、今年度および来年度の教育予算を前年度のままにクギ付けするという方針を決定した。連合会議は、こうした教育予算の実質的な削減に対して、強力な反対運動をおしすすめている。政府は、教育予算の削減によって、5才以下の子どもの教育を制限し、技術教育に関係のない旧式の学校に対する経済援助を重視し、校外勤労学生に対する補助を制限し、さらにレクリエーションその他の成人教育に関する費用を節約しようとしている。これに対して「立木だけを見て、山をみようとしぬ狭小な見解だ」として、連合会議は反対する。

この見地から、連合会議は、積極的に現行の15才から16才への義務教育年限の延長、そのための家族手当の増額、各種育英資金の拡充、さらに次代の社会をになうべきティーン・エージャーのための教育の整備を要求している。しかも、こうした青年男女の教育は、むしろ一般的な人間教育を主眼として行うべきである。それは現在進歩的な学者によってとなえられ、また実行に移されつつある単線型のコンペレレンシブ・スクール(総合課程学校)によって達成することができる。また、すでに就職している青少年のためには、定時制の教育機関を整備すべきであるとしている。

つぎに、イギリスの将来の発展を確実にするためのもっとも大切な施策の一つは、高度な科学的技能者の養成であるが、これについては、まず労働者と文部省の両者がよく話し合い、また労働組合と経営者連盟の両者がよく話し合っ、産業教育協会とでもいべきものを結成しその運営を通じて教育のプログラムを推進すべきであるとしている。

このような連合会議の考え方は、他方可能ながざり彼ら自身による組合員の教育として着々実行に移されている。その一つ「労働大学」の開設は、まず各職場の代表者と自発的な応募者に対する二週間の一般的な教育によつてはじめられた。昨年度には、生産と経営との関係の問題および団体交渉の問題というテーマの外に、さらに社会福祉、産業財政および職場における人間関係というような新しいテーマが加えられた。そして、すべての受講者にたいしては、一切の費用が支給さ

れ、海外からの出席者にたいしては、宿舎が提供されている。こうして、この労働大学は予想以上の成果をあげたといわれる。

一方、こうした新設の労働大学にもまして重要な役割りを果たしているものは、伝統を誇る「夏期講座」と「週末講座」であろう。私の滞在した年の「夏期講座」には約200人の組合員が参加し、一週間づつ合宿教育を受けている。また私の見学したオックスフォードのラスキン・カレッジでの夏季学校には各地の組合書記40人が出席して、組合の組織と運営について自主的な学習を行っていた。こうした教育はさらに地方の組合連合体との協同によって、「週末講座」としても広く実施され、また婦人の労働者に対する「8週間週末講座」あるいは「婦人講座」として行われている。後者は婦人のためのオートメーションとか、婦人のための技術教育とか、婦人のためのアルバイトとかというようなテーマによる教育なのである。

以上のような労働組合を中心とした労働者の自主的教育のなかで、私がとくに興味ぶかく感じたことは、彼らが労働運動全体のなかで、教育の問題をもっとも重要な問題としてとりあつかっているということである。このことは、私の会った連合会議の委員長の強調していたところでもある。しかも彼らは教育の問題を、イギリス国民の当面するもっとも切実な問題としてとりあげ、またこれを現実的になしかたで処理しつつある。組合が実施している各種の労働学校においてさえ、新しい時代の要求に応ずるための人間教育や技能教育が組合活動家の養成以上に重要視されているということに、注目させられるのである。しかしながら、われわれは今一つの重要な意義に目を向ける必要がある。イギリスは二度の大戦を通じての世界各地の植民地の独立によって、今やかつての大英帝国の地位から一歩一歩後退しつつある。そのため、教育の目標もまた、こうした植民地の支配者としての「紳士道」の教育から、新しい時代に適応する有能な技能の人間の教育という方向に切りかえられねばならない。「教育は投資である」という連合会議のスローガンは、単に「労働貴族」とか「御用組合」とかいう概念のみによって割りきってしまうべきではない。むしろ、それは、いかにして国民の繁栄を維持し、新しい意味において再び太陽の没せざる国に更新させるかという切実な要請から主張されているといってもよいのではあるまいか。しかも彼らは、国全体の後退を補って余りある個々の人の実力の充実を目標としている。そこには他律的な言語はなく、たくましい自主的な足音がなりひびいている。私は歴史的社会的条件のちがうが国の労働者にとっても、イギリスの労働者のこうした基本的な英知に学ぶべき多くのものがあるかと考える。

(1958年11月24日「朝日新聞」文化欄)

(YOKOMATSU Takashi, Institute of Education, University of London 1958)

## 【イラストの募集】

BCJA Newsletterでは従来からの原稿募集以外に、イラストを募集したいと思います。印刷の都合上、白黒でA4以内の大きさの紙にお書きいただいたものを編集部までお送りください。Newsletter上には幅8cm程度に縮小して掲載いたしますので、あまり細かな表現のものは困難ですが、どうかよろしく願います。

## British Councilにお世話になった思い出

野辺地篤郎

私は1958年から米国BostonのHarvard大学、医学部のCourses for Graduatesの研修を受ける機会に恵まれましたが、出発に先立ってBritish Councilを訪れて、米国滞在の後、英国を訪問したいのでお世話をお願いしたところ、米国を立つ前にロンドンのBritish Councilに連絡するようにと、連絡先の住所を教えてくださいました。当時のBritish Councilは日本橋の丸善にありましたが、以前に私と同じ放射線医学を専門とする医師でお世話になった方のお名前がちゃんと記録されており、その中で日本を出る前には援助を依頼したのに、英国に行ってから連絡をしなかった有名な先生がおられてびっくりしたのを思い出します。米国を出る前にLondonのBritish Councilに手紙を出して、英国での連絡先と、いつ頃着くかを連絡しました。これは丁度ジェット機が大西洋横断に就航した頃でした。私の英国での滞りは丁度その頃ロンドンに住んでいた妹一家の所でしたが、着いてみると既にBritish Councilから手紙が来ており、着いたらすぐにBritish Councilに来るようにとの指示でした。早速翌日に行ってみると、私が英国で訪問したいところについて全部聞いてくれて、予約を取ってくれるとの事、更にもし観光をしたいのであれば案内を付けてくれるとの事で、あまりの親切さに驚きました。さらにCouncilのオフィスにある放射線医学関係の本で欲しいものがあればくださるとのことで、その親切さには本当に驚かされました。マンチェスターに行く時も列車の時刻を教えてください、更にホテルの予約もしてもらいました。

エンジンバラに行く時も同様でありましたし、エンジンバラでは毎朝迎いの車がホテルに来てくれました。日本にはこのような外国からの訪問者へのサービスをしてくれる役所はないのではないかとつくづく思った次第です。英国の永い外国との付き合い、或いは沢山の植民地との交流によって築き上げられた、すばらしい組織であり、このBritish Councilに匹敵するような組織が日本にあるであろうか？そして私はそれ以来わが日本もJapanese Council というような組織を持って、日本に来る外国人の世話をする必要のある筈だと思いつけています。

我が国は永い鎖国の時代があって、他国との交流など全く必要が無かったし、明治以降は外国の世話になりこそすれ、他国の人を国が世話する必要は無かったのでしょう。然しながら、いまや戦後の復興を終えて、いよいよ他国の人達の世話をすべき時が来ていると考えられます。豊かな日本と言われますが、我々は単に経済的な豊かさだけでなく、文化の面でも豊かな国として成長して行かなければならないとつくづく思います。昭和34年(1959)以来感じていたことについて一言述べさせて頂いた次第です。

(NOBECHI Tokuro, 聖路加国際病院, medical study visit 1959)

## BCJA事務局からのお願い

ご住所、勤務先等の変更がありましたら必ず事務局までお知らせください。転居先不明で郵便物が届かず毎回かなり高額の手送費が無駄になっております。尚、BCJAは終生会員制ですので退職されましてもBCJAの会員資格は継続されます。

下記の会員の消息、現住所、勤務先等をご存じの方は事務局までお知らせ下さい。

石原祐喜子	大久保昭教	後藤邦之	海慶次睦範
杉江 淳	渋谷克栄	中村孝穂	梶浦睦雄
小平信因	松並綾子	森 正巳	瀬尾智一
田村裕子	柴谷篤弘	佐藤美奈子	鈴木早智子
中津その子	勝木新次	山根甚信	高木晶子
山田幸男	神成節子	山口 真	早川 剛

(順不同、敬称略)

## ご報告

すでに会員の皆様にはご連絡済みかと思いますが、会員の濱村みつ子氏がBCJA Newsletter No.7, supplementというタイトルを独断で使用しご自分の文章を会員に配布しました件につきましては、Chairmanの中村高遠氏およびBritish Council駐日代表のBarrett氏の連名で、抗議および謝罪を求める手紙を送付しました。その後6月20日の委員会で濱村氏の処遇を検討し、今後二度とこのようなことを繰り返さないことを書面にて確認する手続きをとるようにいたしました。関係の方々には大変ご迷惑をおかけいたしました。ここに経緯をご報告申し上げます。

### 【編集後記】

Newsletterの編集に携わるようになり早くも4年がたちました。最初発行することが決まったときには内心いつまで続くだろうかという不安感があったことは否定できません。しかし、この間会員の皆様から寄せられました多くの原稿に支えられ、また陰日向になり応援して下さる方々にのお陰でここまでやっていくことができました。毎号編集後記を書く段になると、もうすこし良いレイアウトはないかと試行錯誤したり、イラストなどをちりばめてみたりすればよかったなどと思ってみたり、少しは広告のようなものを入れて予算の足しにできないかと思ってみたり、理想はとどまることはありません。ただ、仕事の片手間ということもあり理想と現実のはざまでも悩むばかりです。

前号のNewsletterで編集のお手伝いをしていただけたボランティアを募りましたところ、さっそく会員の田中治彦氏の奥様、南欧子様より、温かいお申し出がありました。今回のNewsletterはこの田中様の絶大な御協力により完成したものです。ここに心より感謝申し上げます。